

今後の県立高校に関する地域検討会議（第2回）（沿岸南部地区） 意見交換の記録（要旨）

【陸前高田市、大船渡市、住田町、釜石市、大槌町】

令和7年8月29日（金）

陸前高田市コミュニティホール
大会議室

■ 質問

淵上 清 大船渡市長

- ・ 1学級定員の40人については、縛りのようなものがあるのか。
- ・ 地域検討会議の持ち方について、エリアで検討する形でもよいのではないか。

西川 信明 学校教育室高校改革課長

- ・ 1学級の定員については、高校標準法に基づき40人としているものである。
- ・ 学校や学科の地域バランスについては地区を単位としているため、現在の形が望ましいと考えているところ。

■ 意見交換

佐々木 拓 陸前高田市長

- ・ 沿岸部の人口減少や少子化の背景は東日本大震災の影響がある中、当初案に東日本大震災の影響を考慮する文言がない。ぜひ、沿岸部の状況を考慮して検討していただきたい。
- ・ 水産の学科や調理師の学科は復興に必要であり、水産業、観光業、飲食業に係る人材が沿岸地域からいなくなると、我々の復興に係る取組が根本から崩れてしまう。現在の状況だけで判断するのではなく、復興を見据えた検討を行っていただきたい。
- ・ 沿岸部では水産業や観光業が、半導体産業以上に伸びる可能性を秘めており、教育の面からも支える取組を行っていただきたい。
- ・ 医系コースの設置等、魅力的な取組は内陸部の高校のみであり、沿岸部の高校で魅力的な取組を行おうとしてもなかなか要望を聞いていただけない。高田高校では、震災以降、国際交流や大学交流等を実施しており、そうした部分から魅力化を図りたいと考えているので今後検討していただきたい。

淵上 清 大船渡市長

- ・ 大船渡東高校の食物文化科の募集停止については承服いたしかねる。現在、一番希望の多い学科であり、生徒も地元と連携した様々な取組を実施している。大船渡市として水産の街を謳っている中、事業者と生徒が共同した取組ができるというのは大きな強みであり、そのような中、食物文化科が募集停止となるのは理解できない。
- ・ 食物文化科においては新たな取組をしていくことにより、現状の規模は維持できると考えているところ。
- ・ 集約するにしてもなぜ宮古なのかという思いもある。集約に伴い寮を整備するとのことだが、大船渡市でも環境は整っており、市としても学びの環境を整えるための様々な手立てを打っていきたいと考えている。

神田 謙一 住田町長

- ・ 歴史的にも経験のない少子化の進行の中、学びの環境を保障するという部分については評価をする。

- ・ 1 学級の定員については、国に改善の要望もしているとのことであるが、沿岸部に生まれた子どもたちをどのように育てるのか、また、持続可能な社会の作り手や地域産業を担う人材の育成という観点から今後も検討が必要であると考え。
- ・ いわて留学へのサポートを行うとのことだが、生徒の確保の在り方を考えたときに、将来の産業動向を注視しながら検討する必要があるのではないか。
- ・ 地域にとって高校の存在は、教育分野のみではなく、公共交通の部分にも大きく影響がある。そうした様々な分野を横断的に考えながら検討していく必要があるのではないか。

小野 共 釜石市長

- ・ 沿岸部では 15 歳における人口減少が大きく、盛岡等の内陸部に勉強やスポーツの面で進学する生徒が多い。
- ・ 釜石市でも、医系コースの設置を要望してきたが、現状では盛岡 1 校のみとなっていることから、ぜひ沿岸部にも医系コースを設置し、地元の生徒が盛岡に行かなくても医学部に進学できるという選択肢を作っていただきたい。医系コースの設置は、学力の底上げや人口減対策にも繋がる。
- ・ 釜石商工高校は令和 11 年度に学級減の見込みであるとのことだが、地域の企業からは即戦力となる人材の育成を求められており、地域に求められる学科をバランスよく設置していただきたい。

平野 公三 大槌町長

- ・ 大槌高校は大槌町にとってなくてはならない学校であり、地方創生の核となる存在である。大槌町でも複数のコーディネーターを配置し、地域を挙げて大槌高校の探究学習を支援してきたところである。
- ・ 大槌高校に地域探究科が設置され、長期ビジョンにおいて普通科改革のモデルとして今後のモデルとなるとされていることは、大槌町と大槌高校の連携が評価されたものと考えているところ。
- ・ 今後も県と大槌町が連携し、地域を担う人材の育成に取り組みたいと考えており、そのためにも、コーディネーター等の専門的な人材の配置について協力をお願いしたい。

伊東 孝 陸前高田商工会 会長

- ・ 地域や地域産業を担う人材の育成という観点から、高田高校の海洋システム科の募集停止については強く反対する。
- ・ 高田高校の海洋システム科については、現在、水産業がグローバル化している中、6 次産業化に対応する人材育成に取り組んでいる。また、ビジネス知識の習得や産業振興に貢献する取組を実施するなど、海洋システム科は魅力ある学科となっており、今後入学者が増えるのではないかと考えているところ。
- ・ 地域とも密着した取組も行っており、生徒や保護者も充実した教育内容を評価していることから、募集停止にするのではなく、募集定員を増やす方向で検討していただきたい。

齊藤 光夫 大船渡商工会議所 専務理事

- ・ 大船渡商工会議所では、あわびのブランド化に向け大船渡東高校の食物文化科と連携している。昨年はあわびを使った料理を考案してもらい、地域からの評判も大変良かった。また、大船渡市と大船渡商工会議所が共催しているビジネスコンテストにも積極的に参加してもらっており、非常に頼もしく感じている。
- ・ あわびのブランド化事業を手伝っていただいている復興庁のアドバイザーの方からは、大船渡東高校の厨房設備はすごく立派であり、有名な調理専門学校の設備にも匹敵するとの評価をいただいている中、調理師養成施設を宮古水産に集約するというのは非常に残念であると感じており、食物文化科を存続させていただきたい。

佐藤 準悦 大船渡市農業協同組合 常務理事

- ・ 水産及び調理師養成施設の集約については、今後の生徒数の減少等を考慮すると仕方ないと思うが、短絡的に生徒数のみで集約を判断するというのはいかがなものかと感じる。
- ・ 集約先となる宮古水産高校への通学のハードルが高いことから、結果的に集約先の学校の生徒確保も厳しくなるのではないかと。
- ・ 生徒の選択肢を確保するためにも、水産や調理師養成施設の学びをコースとして残せないか検討していただきたい。

千葉 憲一 気仙地方森林組合 業務課長

- ・ 住田高校に対する住田町の様々な支援がある中、地域校としての位置付けについては、住田町の取組が一定の評価をいただいたものと理解している。
- ・ 募集停止基準の20人については、これまでの経緯等を考えると自然なものと考えているが、仮に20人を超えない場合についても、機械的に判断するのではなく、在校生、保護者、同窓会や住田町と十分に相談したうえで判断していただきたい。また、その際は遠隔教育の導入や校舎等の活用についても検討していただきたい。

奈良 朋彦 一般社団法人邑サポート 代表理事

- ・ 住田高校が地域校として存続するという事は、ある意味、地域の側も試されているということではないか。現在、魅力化の取組により地域と学校が協力しながら様々な取組を行っているところであるが、お互いが成長しあえる環境をどう作っていくかという部分が大切である。
- ・ 小規模校を選んでもらうためにはPR活動が大切である。各学校の特色を学校や地域が様々な場面でPRすることが大切であり、県教委にもPRについて協力いただきたいと考えている

小笠原 順一 公益財団法人釜石・大槌地域産業育成センター職員

- ・ 地域の産業を担う人材の育成という言葉が色々出てくるが、インターンシップや企業訪問といった活動を継続的に実施していただきたい。高校生が企業と関わることで、企業も魅力を高めるための取組が必要になり、それが企業の成長につながると思う。
- ・ 沿岸の市町には三陸ブランドとして連携した取組を実施していただきたい。また、今後、環境産業は成長していく可能性があることから、教育の中に環境というキーワードを盛り込んでいただきたい。

兼澤 幸男 MOMIJI株式会社 代表取締役

- ・ 専門教科の教員が不足し専門学科の集約が必要ということであれば、企業等から指導者を派遣してもらおう方法を検討してはどうか。
- ・ 普通高校に進学した生徒の中にも、専門的な学びを求める生徒は一定数存在すると思われるので、そうした生徒の学びの環境を県で整えることにより、地域の教育の拠点として素晴らしいものになるのではないかと。

芳賀 光 有限会社ティー・ティー・エムつつみ石材店 代表取締役

- ・ 少子化が進む中、同じ規模で学校を存続させるのは不可能であると認識している。
- ・ 水産の学びについては、現在の入学者の状況や中学生アンケートの結果を見たときに本当に必要なのかという思いもあるが、一方で、残さなければならないという思いもある。
- ・ 私立高校は魅力があり、授業料の無償化によりますます私立高校に生徒が流れる状況になるのではないかと。また、県立高校は私立高校と比べ、教員の魅力が見えづらいつ感じている。

- ・ このような場での大人の意見は、様々ながらみがある中での発言となるため、当事者である子どもの意見を聴くための機会を増やす必要があるのではないか。
- ・ 学科の名称についても、昔から同じであることから、変更してもよいのではないか。

齋藤 卓 陸前高田市立高田第一中学校PTA 会長

- ・ 県内の高校の選択肢が少なくなることで、私立高校や他県の高校への進学者が増えることを懸念している。
- ・ 水産や調理師養成施設の学びを宮古水産高校へ集約し、寮を整備するとのことだが、寮に係る経費を懸念して進学をあきらめる家庭もあると思われることから、改めて検討していただきたい。

及川 由里子 大船渡市立PTA連合会 理事

- ・ 自分の子ども達の学校生活を見てみると、少ない人数により、一人一人の負担が大きくなっていると感じている。そのことを考えると、一概に統合や集約がだめということではなく、結果として魅力的な形になるのが望ましいのではないか。
- ・ 現在、進学の際に総合型選抜を選択する生徒が多く、高校での派遣事業の取組は重要である。また、その体験が次の学びのきっかけをつかむことにも繋がっている。
- ・ 私立高校の魅力があるというよりは、私立高校は情報の提示の仕方が上手であるという印象を感じている。県立高校では説明会等で聞いてもはっきりしない部分も多いことから、生徒や保護者への情報提供の仕方を改善する必要がある。
- ・ 寮や下宿は親のコストが増加するイメージがある。親は高校までは家から通わせ、その後の大学進学に備えて教育資金を考えている家庭が多いと思われるので、何かしらの支援を検討していただきたい。
- ・ 大船渡東高校の食物文化科のビジネスコンテストでの発表を何度か聞いたことがあるが、大変立派である。集約がやむを得ないとしても、同じような学びが担保されるような再編としていただきたい。

芳賀 新 大槌町立吉里吉里学園PTA 会長

- ・ 東日本大震災により少子化のスピードが速くなったとはいえ、今に始まったことではなく、今更議論していることに疑問を感じている。自分たちの市町村に子どもが必要というのであれば、市町村が本気で子どもに投資し、環境整備を行わなければ学校は残らないことから、地域の主体的な関与が必要である。地元に残したい気持ちはあるが、それだけでは維持できない。市町村の本気度が問われているのではないか。
- ・ 魅力ある高校は進学・就職の出口が見える。ビジョンを持たない生徒にも道を示せる学校が理想である。
- ・ 少人数では教育の質が保てないことが懸念される。統合や集約はビジョンを持って進め、専門性の確保や環境整備も考慮すべきである。また、再編計画については中高生にも意見を聞き、どんな高校が必要かを考えるべきであり、子ども中心の教育の在り方を議論する必要がある。今のタイミングが県立高校の在り方を考える最後のチャンスである。

山田 市雄 陸前高田市教育委員会 教育長

- ・ 地域を担う人材の育成については、地域に高校があるかどうか重要である。気仙地区は普通科に加えて専門学科が充実しており、他の地域に流出する割合が少ない地域であり、地元の高校で学んだ生徒が地元を支えてきた。
- ・ 今年度の入試では、気仙地区の高校で4学級分の欠員があったことから学級減の必要性は理解するが、学級数を減らしても専門学科の学びを確保するため、例えば総合学科のコースとして学びを

維持できないか検討していただきたい。

松高 正俊 住田町教育委員会 教育長

- ・ 水産及び調理師養成施設の集約については、気仙地区から宮古市への通学は難しいため、保護者の負担を軽減するために寮や下宿の整備を検討していただきたい。
- ・ 多様な子どもたちを受け入れているが、現場では職員の数が不足している状況もある。きめ細やかな教育が実施できるよう、県全体での教員確保に努めていただきたい。
- ・ 医師確保については再編計画に具体的な記載はできかねると思うが、気仙地区からも医師を目指す生徒が入学できる高校を設置していただきたい。
- ・ 今回の当初案に係る資料の中で、推測とはなっているが令和13年度に募集停止となるような記載がある。一般の方の中には、令和13年度に学校が無くなると思われる方もいるのではないかと。住田高校は現在も町と連携しながら魅力化の推進に取り組み、留学生の確保に努めている中で、この資料については良い印象を持ってない。資料については慎重に公表していただきたい。

高橋 勝 釜石市教育委員会 教育長

- ・ 医師確保は釜石市にとっても重要な課題であるが、県全体での課題でも。盛岡第一高校に設置しただけで終わるのではなく、沿岸地区にも設置するという内容を再編計画に記載することを検討していただきたい。
- ・ 釜石高校では令和10年度に学級減の見込みとのことだが、仮に学級減となった場合こそ手厚い配慮が必要であり、学級減になったことにより生徒が不利を受けないような教員配置等を検討していただきたい。また、釜石商工高校についても、仮に、新しい学科となる場合には、地域の意向を踏まえた教育内容としていただきたい。
- ・ 地元の子供たちが、他の地域の学校に行かなくても自分の夢が実現できると感じられるような魅力を、各県立学校が出していく必要があるのではないかと。特に、普通科についてはどの学校も一律な印象を受ける。また、体験入学の実施方法の工夫等により、もっと地元の小中学生に高校の魅力を発信できる工夫が必要なのではないかと。

松橋 文明 大槌町教育委員会 教育長

- ・ 今回の当初案については、地域校の位置付け等、小規模校を残す方針が示されたことはいずれも感じている。
- ・ 現在の高校は生徒から選ばれる立場であり、生徒も減少している中ではあるが、生徒の選択肢を安易に奪うことに繋がることから、学科は残すべきと考える。
- ・ 教員が不足しているとのことであるが、リモートでの授業等での対応も可能ではないかと。
- ・ 大槌高校では地元以外からの入学者も多い。これからは、地域だけでなく県全体への貢献を意識した教育の在り方が求められているのではないかと。

佐藤 学 気仙地区中学校長会（陸前高田市立高田第一中学校長）

- ・ 気仙地区は郷土愛が深く、地域の将来を担いたいと考えている生徒が多い地区である。それは、小学校も中学校も地域との結びつきが強いことが要因である。
- ・ 当初案については、沿岸南部地区の重要な産業である水産や調理師の将来が切り捨てられるという印象を感じた。
- ・ 少子化により学校規模が小さくなることで、部活動や生徒会活動といった子どもたちにとってやりたいことができる環境が無くなってしまふことを危惧している。そうなると、学校の魅力もなくなり、沿岸南部地区から人材が流出することに繋がるのではないかと。
- ・ 再編計画は、既存の学校をベースに切り貼りして検討しているだけと感じている。また、普通科

の学級数を減らすことは仕方ないが、専門学科を減らすことは賛成しかねることから、気仙地区に大きな総合的な高校を作り、私立高校に負けない魅力を出していくという新しい発想も必要ではないか。

金野 学 釜石地区中学校長会（釜石市立唐丹中学校長）

- ・ 学びを集約して寮を整備するとのことだが、金銭的な部分もあるが、精神的な部分でも安心して寮に入れることは難しいのではないか。生徒自身に明確な目的意識があり、家を出て寮に入っても学びたいという意識が無いと、寮を選択しないのではないか。また、その判断を15歳の生徒にさせるのは難しいのではないか。
- ・ 中学校での進路指導がますます大事になると感じており、高校の選択を含め、将来何をしたいか明確な目的意識を持つ必要がある。ただし、目的があっても家から通える範囲に学びの選択肢が無いと、生徒は地元に残らないことから、個人的には、家から通える範囲に生徒の学びを確保する必要があると考える。

西川 信明 学校教育室高校改革課長

- ・ 募集停止基準については、機械的に当てはめるのではなく、地元自治体ともよく相談したうえで判断していきたい。
- ・ 医系コースの設置について、現在は盛岡第一高校に設置しているのみであるが、沿岸部でも医学部志望者に対し、学校が全面支援を行っており、医系コースがなくても医学部への進学実績のある高校はある。今後、このような取組を中学生に対し今まで以上に周知して参りたい。
- ・ 推測される学級減の時期を公表した理由は、自分の住んでいる地域の学校の状況を知らない方もいることから、早い段階で様々な取組を行ってもらうために公表したものである。
- ・ 寮の整備に伴い、生徒の生活のサポートも必要と考えており、保護者が安心して寮に預けられる体制についても検討する必要があると考えているところ。